

優秀修士論文概要

## オンライン空間の文化とその実践に関する人類学的考察

打 田 秀 太

### はじめに

2023年現在、スマートフォンやPC等の普及により、インターネットに接続して情報を受信・発信する行為は、年齢や社会的地位を問わず日常的なものとなった。しかし、そうしたインターネット上のフィールド＝オンライン空間で実践されている文化や習俗には、オフラインでは認識や言及のされていないものも多い。昨今文化人類学の領域においてもオンライン空間を含めた調査・考察がなされているものの、そうした先行研究において「オフライン中心主義」的な視座が半ば前提とされてきた点を本論文は指摘する。その上で、オンライン空間上で参与観察や聞き取りといった調査を展開することで、これまで語られてこなかったオンライン空間の文化の記述と、現地の文脈をふまえたオンライン空間の考察を試みた。

### 先行研究の検討

本論文では、オンライン空間に対する捉え方を軸に、文化人類学領域におけるオンライン空間に関する先行研究のアプローチを三つに分類して整理した。

一つ目のアプローチが、オンライン空間を「調査ツール」として捉える「オフライン空間研究を補佐するオンライン空間の活用」である。例えば、Google ストリートビューを用いた路上観察が挙げられる。こうしたアプローチは、感染症による移動制限等、様々な制約を回避して調査を行う事が可能な一方で、所謂“現地調査”に備えた取っ掛かりとしての認識を拭えていない。

二つ目のアプローチは、オンライン空間を「オフラインの拡張」として捉える「オンライン空間の記述を組み込んだオフラインの研究」である。SNSでの事例をオフラインの文脈と関連させて考察するようなアプローチは、オフラインの研究をより拡張・進展させる可能性を秘めている一方、このアプローチのみが主流となる事で、オンライン空間がオフラインに完全に従属しているような誤解を生みかねない。

最後に、オンライン空間を「文脈を有する場」として捉え「オンライン空間の文化や人々を対象としたオンライン空間上の調査」を実施するのが三つ目のアプローチである。例えば、オンライン上の仮想世界を調査フィールドとし、実際にアバターを制作してフィールドワークを行うアプローチが該当する。このアプローチは、所謂“現地の文脈”をオンライン空間にも適用し、新たな研究領域の開拓可能性を秘めている。但し、オンライン空間は、テキストで交流を行う掲示板や、視覚的にはオフラインとほぼ変わらない仮想世界など、各々の空間が各々の仕組みやルールで成立しているが、それらの間に物理的な距離や境界が存在しない事で、多くの人々は「同時多発的な関与・実践」を行っている。この現状は

「現地」が単一のオンライン空間のみだとは限らない事、人類学者も同時多発的な参与が可能である事を示している。

## 研究対象

本論文では、オンライン空間で誕生・波及し、同時多発的に関与や実践の行われている文化の代表として「淫夢」を調査対象に取り上げた。淫夢はゲイ男性向けのアダルトビデオを基盤とするオンライン上の文化で、2002年にネット掲示板で原型となる活動が生まれてから現在に至るまで20年以上もの間、多種多様な形態・人々・プラットフォームによって実践されてきた文化である。著作権や肖像権、同性愛や誹謗中傷といった多数の問題を抱えた文化である故に、先行研究やメディアが淫夢について言及する際は、実践のあり方や実践者らについては十分な理解や記述がされていなかった。そこで本論文では、実際に淫夢に関するコミュニケーションや創作を実践している人々に話を聞き、現場に参与する事で、文化実践についての記述と当事者の視点からの分析と考察を試みた。

並行して本論文が強調したのは、「オンライン空間に対して、参与観察やインタビュー調査と言った人類学的アプローチはどう対応できるのか/すべきなのか」という方法論的な問題提起である。オンライン空間の発展と普及に伴い、そうした場での交流や文化は規模と影響力を増しており、人類学調査の研究対象もオフライン空間だけで事例が完結する状況は少なくなっている。一方で、多くの先行研究がオフラインと同様の文脈や手法をオンラインにも適用してきた点を本論文は指摘した。

## 調査概要

2022年5月から同年12月まで、日本語圏のオンライン空間を対象に約半年間のフィールドワークを行った。調査はSNS「Twitter」でのアカウント作成から開始し、最終的には他SNSやWebサイトを複数横断する形で実施された。本論文で採用した調査手法は参与観察と聞き取り調査である。参与観察は、SNSにおける投稿情報の閲覧や他アカウントとの交流、Webサイトにおける動画や文章等のコンテンツとそれに付随するリアクションの閲覧と投稿を主に実施した。聞き取り調査では、参与の過程で出会った「淫夢に現在進行形で関与していた12名」と、「過去に関与していたが現在は積極的に関与していないと述べた2名」を対象に実施した。聞き取り調査においては、現地＝オンライン空間の文脈において、オフラインでのステータスを尋ねる行為は信頼を損ねかねない判断したため、年齢や性別、社会的地位や住所などについては、調査者から能動的に尋ねることはせず、オンライン上で共有されているものを参照した。

## 考 察

調査をふまえ、インフォーマントらの語りを基に淫夢という文化の再解釈を試みた。淫夢に関する実践には多様な形態が見られ、淫夢という表現自体も、各インフォーマントによって細かな差異が見られた。この認知の差異について、「淫夢の定義」が非常に曖昧なもので、かつ主観に依拠しているという事は人々の間でも共有されていた。その一方、主語を「私たち」や「淫夢厨（淫夢に積極的に関与する人々の通称）」に置換して語らうインフォーマントらは、淫夢という枠組みを確かに共有出来ており、その中に自身を置いていた事もまた確かであった。曖昧な定義と確かな枠組みという相反する性質を、本論文では淫夢とそうではないものを区別する語録の「境界としての機能」と、オンライン空間におい

て「淫夢が発揮する/してきた役割」という二つの解釈によって説明を試みる。

淫夢は定義や領域が曖昧な概念であり、様々な形態の情報発信によって、人々は各々が拡張・収縮した定義を淫夢として認識していた。淫夢の実践において、創作者がそれを淫夢だと主張する事で消費者もまたそれを淫夢として受け入れる。しかし、境界のないものを認知する事は出来ない。曖昧な境界を、曖昧なまま淫夢の定義と両立させていたのが「語録」だと本論文は主張した。例えば、聞き取り調査において、普段は語録で会話しているインフォーマントに対し調査者が「日常的に語録で発信している人も聞き取り中は丁寧語で話してくれることが多い、私から自発的に語録を使って話しかけた方が良いのだろうか」といった相談をした際、「ちゃんとした調査だからないと思うけど、先に語録で話しかけられていたら私も語録で対応したかもしれない」と述べた事例や、日常的には語録と異なるスラングを好んで用いていたインフォーマントが、聞き取りの際だけは語録を積極的に用いて応答した事例があった。前者は聞き取りを学術的な調査だと認識し、語録を使う場面ではないと判断しており、後者は聞き取りを淫夢の調査だと認識し、語録を使うべき場面だと判断していた。

この「境界としての語録の機能」を基に、オンライン空間における淫夢の役割/機能について考察を試みた。オンラインでの交流において、自身が依拠するコンテンツやジャンルを求められる状況は多い。例えばテキスト掲示板であれば、スレッドによって話題が区分されており、元の話題から外れた交流は忌避されていた。こうした中、淫夢は曖昧な定義と語録の明確な境界によって、本来は零れ落ちてしまう情報を掘り上げ、発信する権利を与える。淫夢の文脈によって多くの人々の目に触れるようになり、しかもメディアやオフラインで取り扱われることはない。参与を行う中で、淫夢に関与する人々の間には、淫夢を「表に出したくない」と同時に「拡散されてほしい」という、一見相反する意識が両立しているように感じられた。この矛盾を説明するのが「受け皿」という表現である。鉢に敷かれた受け皿は鉢を参照する際には言及されないが、受け皿が広ければ乗せる鉢の種類や数を増やすことが出来る。例えば「写真撮影」の愛好家が集うコミュニティで「ある文芸作品」の愛好家を探すのは困難だろう。写真撮影の鉢の上では写真撮影に関するコミュニケーションが実践されるべきだからだ。しかし、淫夢においては写真撮影や文芸作品を淫夢として取り込む＝受け皿に乗せることによって、容易に各愛好家との繋がりを構築することが出来る。淫夢によって「関与可能な領域が増える」事と、「対象が表に出せるものであり、個々に独立している」事は、受け皿のイメージによって同時に成立出来る事が分かる。

### おわりに

本論文では、オンライン空間における「淫夢」という文化を対象に、参与観察やインタビュー調査によって得た質的資料を基に記述と解釈を示した。淫夢は反規範・反社会的な一面の強調や具体的な言及の忌避が多い文化であったが、オンライン空間への参与観察による文脈を踏まえた解釈によって、「語録という言語表現によって維持される流動的かつ残余的な文化実践」という側面を提示する事が出来た。一方で、「オンライン空間の参与観察」について、本論文は指針や意義、成果の共有方法を明確に提示できたとはいえない。また淫夢についても、倫理的な問題や外国語圏の実践については、論文内で十分に議論する事が出来なかった。調査者の今後の課題として向き合っていきたい。